



所在地 秦野市柳川字竹ノ上 822 外

調査期間 令和 2(2020) 年 7 月 1 日～

令和 3(2021) 年 3 月 31 日

調査面積 3040m²

担当者 諏訪間直子、吉澤 健、塚田順正

調査概要

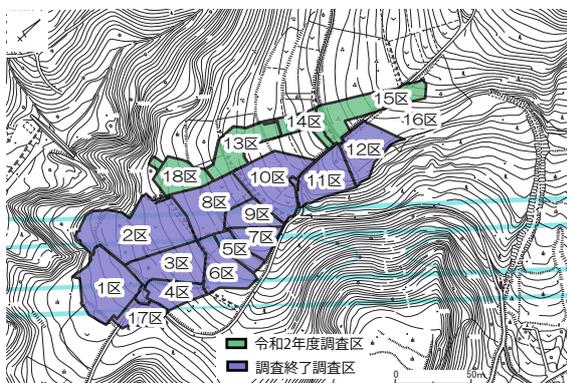
柳川竹ノ上遺跡（秦野市No. 141）の調査は、中日本高速道路株式会社が計画する新東名高速道路建設にともなう事前の発掘調査です。

調査は平成 27 年 10 月 1 日から平成 29 年 2 月 28 日まで実施しており、今回はその継続調査となります。

調査地点は秦野市の西部である上地区^{かみ}に所在し、小田急線渋沢駅の北西約 3km にあります。

遺跡は足柄平野を流れる酒匂川の支流である濁沢^{にごりさわ}左岸、丹沢山地の鍋割山から南に派生する丘陵の尾根上斜面に立地しています。標高は 226 m～270 m を測ります。

令和 2 年度の主な調査成果としては、近世・中世、平安時代、縄文時代の遺構、遺物が発見されました。



第 2 図 調査区配置図 (1/5000)



第 1 図 調査位置図 (1/25000)

近 世

段切り、溝、宝永火山灰廃棄土坑、畠跡（ウナイクルミ跡）が発見されています。ウナイクルミとは、この地域の近世文書で使用された名称で、宝永噴火による火山灰を畠地に鋤包み、復旧させている行為をさします。畠跡は耕作時の鋤痕が広がっている形状のもので、耕作土に宝永火山灰が 2～3 回鋤込まれた状態が確認できました。宝永火山灰廃棄土坑は地形に沿って長さ 5 m、幅 0.5 m の掘り込みに宝永火山灰を廃棄した土坑です。宝永 4（1707）年の富士宝永大噴火以前の遺構は段切りと溝で、溝の覆土には宝永火山灰降灰時の純層が堆積していました。段切りに伴って掘られた溝と考えられません。

平安時代

竪穴住居跡 1 軒と、前回の調査地区から継続する溝を一条検出しました。住居跡の西側は地



写真1 H16住居 カマド検出状況(南西から)

すべりの影響により消失していましたが、カマドが良好な状態で残存していました。カマドは礫を用いて構築され、燃焼面上部からは土師器の甕が出土しました。調査全体を通して竪穴住居跡は16軒発見されました。溝は東西に走行をもち横断面は逆台形で、しっかりと掘り込んでいました。平安時代の住居跡はすべて溝の南側にあることから、この溝は何等かの区画溝、あるいは排水溝の用途が考えられます。溝の西側は南に向かって歪んでいる状況が確認されましたが、調査区を拡張して調査を行ったところ、溝の位置が北側へ戻った状態で検出されました。また、拡張調査区の北壁では、溝の覆土の上にローム層が堆積している状態を確認しました。このことにより、地すべりの影響で溝の底部と上部が分断されて、溝の下半部の上にローム層が移動してきたことが明らかとなりました。南側に歪んでいる部分は分断された上部が移動したものと考えられたため、ローム層下に存在する溝底部の検出に努めました。溝の底部は西側のローム層下に一部確認できましたが、さらに東側では確認することができず

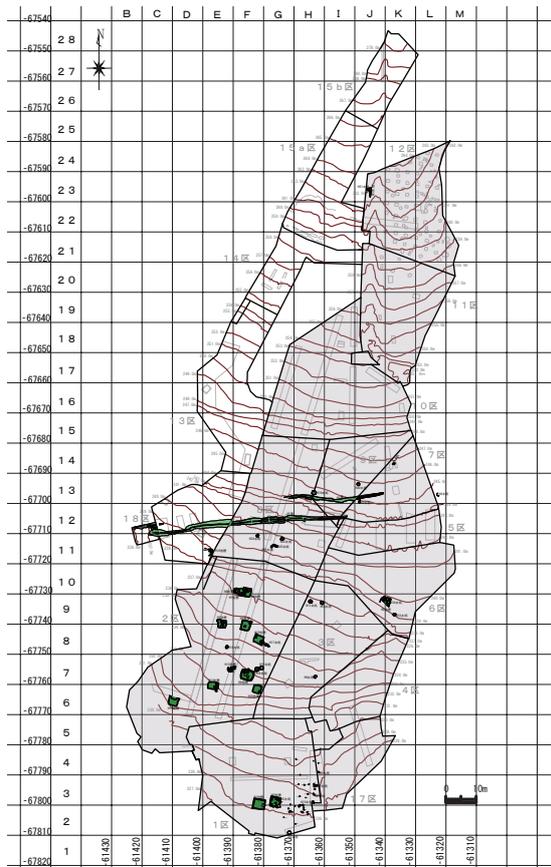
た。東から西へ下る溝であるため東側は溝の底部ごとずれて移動していると考えられます。

縄文時代

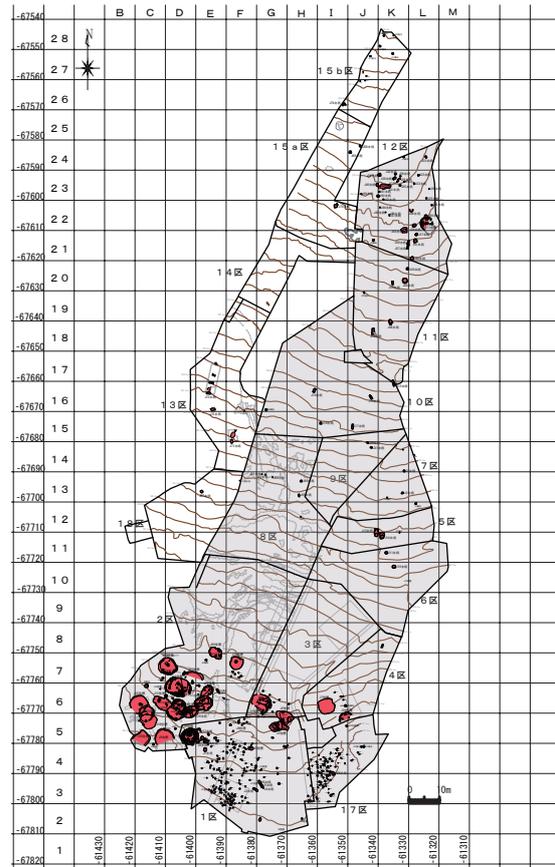
土坑、集石、焼土跡を検出しました。J68号土坑からは縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器の深鉢が3個体出土しました。いずれも地すべりの影響により、深鉢は上部と下部に分断し、上部は斜面下方である南東側へ移動した状態で発見されました。J69号土坑は移動したローム層中から検出されました。五領ヶ台式土器が土坑の底面に倒れた状態で出土しています。遺構には伴っていませんが、多くの縄文土器や石器が出土しています。焼けた礫や、黒曜石の剥片も多く、上方に所在した何等かの遺構が地すべりや地割れによって崩落・流入したものと考えられます。

まとめ

今年度で新東名高速道路の用地の一部を除き、柳川竹ノ上遺跡の調査は終了となりました。本遺跡は標高226mから270mまでの比高44mに及ぶ斜面地であり、全調査区を通じて地すべり地割れの影響を受けた状態で遺構が発見されました。遺構と地割れの切り合いから、大きく3回の地震変動があったことがわかりました。一番古く位置づけられる地割れは弥生時代の土坑に切られていたことから、弥生時代以前に起きた地震による地割れです。次に遺構の切り合いは確認できませんでしたが、地割れ直後に平安時代降灰の延暦・貞観スコリアの特徴をもつ火山灰が堆積していることから、平安時代に起きた地震による地割れ地すべりが想定され



第3図 平安時代遺構分布図 (1/2500)



第4図 縄文時代遺構分布図 (1/2500)

ます。最後の地すべりは宝永火山灰の廃棄土坑もずれた状態で確認できることから、宝永火山噴火後の大地震に由来すると考えられます。そのような環境の中で、本遺跡では縄文時代早期から細々と人の営みが現れました。

標高の高い調査区では、縄文時代草創期の尖頭器が1点出土しており、今回調査した地区では早期の土器片が多く出土しています。神奈川県内でも検出例が少ない中期初頭の五領ヶ台期の住居跡を標高の高い位置で1軒発見し、当該期の土器も多く出土しました。縄文時代中期後半の加曾利E式期の住居跡は標高の低い位置にまとまって発見されており、時代が新しくなるにつれて、生活の拠点となる場所の高度を

下げてきた様相が明らかとなりました。弥生時代はわずかながら狩猟の場として活用されたものの継続はなく、古墳時代の遺構と遺物は発見されませんでした。空白期間を経て平安時代の一時期に一つの集落が営まれましたが、その集落は尾根を横切るように掘られた一条の溝より下方に限られていました。カマドをもたず、中央に炉を設けた竪穴建物も検出しており、何等かの作業場であったのではないかと考えられます。完形の鉄製鋤先が出土した住居跡もあり、本遺跡の特徴として注目されます。そして、江戸時代から現代にいたるまでは、地すべり以外の大きな地形の改変なく、畠地として利用されていたのでした。(諏訪間)



写真2 H1溝完掘状況(東から)



写真3 H1溝ズレ断面(東から)



写真5 J68土坑土器出土状況(東から)



写真4 H1溝ズレ部分完掘状況(東から)



写真6 J69土坑土器出土状況(南東から)